

2002年度国際交流活動について

人文学研究所所長 鈴木 陽 一

1 基本方針と行動計画

昨年の総会で承認を得た国際交流活動の基本方針は、以下のようなものであった。

2001年11月、本学におけるシンポジウム「歴史と文学の境界」が成功裏に実現したことを踏まえ、従来の浙江大学というパートナーとの関係を大事にしつつ、更に国際交流を充実、発展させること、具体的には、人文学研究所が東アジアに於ける学術交流の重要な拠点となりうるようなネットワークの可能性を探ることを目標とする。

こうした方針に基づき、今年度は浙江大学も含め、中国、香港、台湾の複数の研究期間を訪問し、2003年度以降の学術交流の道を開拓することとした。

2 活動報告

2-1 期間

2002年11月5日－11月18日

2-2 訪問した研究機関

台湾／中央研究院の中山人文社会学研究所、台湾大学、台北師範学院、淡江大学
香港／香港大学の亜細亜研究センター、日本研究所、香港Public Record Office、香港歴史博物館
上海／社会科学院歴史研究所、華東師範大学、華東理工大学、上海師範大学
杭州／浙江大学日本文化研究所、同中文系

2-3 台湾での意見交換

11月5日 台北到着 PM8:00 台湾大学／王泰昇 教授 (1)

11月6日 中央研究院／近代史研究所／档案館／中山人文社会科学研究所／湯熙勇 教授 (2)

11月7日 淡江大学／日本学科・日本研究所／馬耀輝 教授 (3)

(1) 王泰昇教授 (国立台湾大学・法学部)

2002年、10月16日～17日、中京大学で開催されたシンポジウムで「台湾の近代と日本」で王氏の「台湾総督府法院文書目録の編纂」という報告を孫委員が聞き、急遽、意見交換を申し出た。王氏の研究は、1895年11月20日に軍事命令「台湾総督府法院職制」により成立した「台湾総督府法院」が所蔵した裁判判決原文(1895～1945年10月24日までの文書、1998年以降、本格的に発掘された)に関するものである。

- ① 刑事・民事などの裁判判決原文に関する研究は、今後、歴史学、社会学、経済学などの幅広い分野との共同作業を必要とする。
- ② さらに、同じ判決原本が朝鮮総督府、満州国、中国華北の占領地、香港などの旧「大日本帝国」の勢力範囲であった地域に残されている可能性も否定できない。中国史／朝鮮史などとの共同研究も可能。
- ③ 王氏自身もこの点において共同研究の可能性を追求したいと考えている。

(2) 湯熙勇研究員（中央研究院・中山人文社会科学研究所）

旧三民主義研究所。国民党政権から民進党への政権交代によって「三民主義」を冠したさまざまな研究機関の名称は変更を余儀なくされた。ただし、これは政治上の理由にすぎないもので、それぞれの研究所に優秀な人材が集まっていることに変わりはない。現在の中山人文社会科学研究所が推進している研究プロジェクトは

- ① 環中国海プロジェクト
- ② アジア太平洋地区プロジェクト
- ③ 海難事故プロジェクト
- ④ 移民と華僑プロジェクト

湯氏が中心となる研究はいずれも「海洋」との関連を視野にいたったもので神奈川大学／人文学研究所の共同研究（山口建治代表：環シナ海伝承文化の研究）や常民文化研究所とも共通性がある。中山人文社会科学研究所は中央研究院の台湾史研究所、近代史研究所とも密接な協力関係を維持している。

(3) 馬耀輝教授（淡江大学・日本語文学系）

淡江大学の学生総数は約2万名。馬氏は日本語学科所属でありながら、日本研究所の研究員でもある。日本語学科は一学年60名、4年までに1年間、麗澤大学へ学生を派遣する提携関係をもっている。麗澤大学も淡江大学との交流を重視し、淡江大学に専用の寄宿舍をつくり、日本から学生を派遣している。そのほかに橘女子大学、早稲田大学と交換留学生制度を設けている。学部のほか、日本研究所は修士と博士課程の教育機関で主なテーマは日本研究全般である。

☆蔡琴教授（台湾における神社研究）が歴史学部にも所属。

淡江大学には日本語学科のほかにロシア語学科／スペイン語学科がある。また、外国語教育に関連するシンポジウムを、中国・台湾の外国語学部をもつ複数の大学が持ち回りで毎年開催している。

2-4 香港での意見交換

- 11月7日 香港到着 香港大学／日本学科／王向華 教授 (1)
11月8日 香港大学／アジア研究センター／李培徳 教授 (2) 香港大学図書館見学
11月9日 香港歴史档案馆（Public Record Office of HongKong）、香港歴史博物館を見学

(1) 王向華教授（香港大学・日本学科）

専門は香港のポップカルチャー。現代香港の日本文化流入などについて研究。日本語学科はとくに日本との交流に積極的。交流の開始はまず、教員の交換派遣から始めたいという提案があった。

教員の交換派遣から、学生の交換派遣へと発展させたい、短い期間であれ、いつでも歓迎する、学校の宿泊施設や研究室などの提供も可能ということであった。

オックスフォードで社会人類学のPh.D.をとったときは、香港に進出した日系企業（具体的にはヤオハン）における日本人管理職と現地スタッフ（香港人従業員）との間の組織内コミュニケーションの様態（企業文化）に関する社会人類学的研究などがある。

王氏の主著：Japanese Bosses, Chinese Workers: Power and Control in a Hong Kong Megastore (Univ. of Hawaii Press ; Anthropology of Asia Series, 1999)。

主な日本語論文：「香港の日系スーパーマーケットの組織文化」（『香港社会の人類学——総括と展望』風響社、1997）、「香港の日系スーパーマーケットの現地従業員」（『中原と周辺——人類学的フィールドからの視点』風響社、1999）等。

(2) 李培徳（香港大学・アジア研究センター）

アジア研究センターのコアメンバーは社会学，香港史，東南アジア2名に李氏の5名。センター Fellow（兼任）メンバーが30名おり，そのほか職員が15名程度いる。主な研究プロジェクトは，

- ① 現代香港の研究，
- ② 1945年以前の香港の研究，
- ③ 東南アジア研究プロジェクト，
- ④ アジアの都市プロジェクト，
- ⑤ 東北アジア（韓国を含む）の研究を準備中

李氏自身の研究テーマは「香港の日本人研究」である。

香港大学・アジアセンターと日本のパートナーになっている組織はアジア研究所。ほかに東京大学東洋文化研究所と協力関係をもつ。

来年の3月にミッションスクールに関する大規模なシンポジウムが計画されている。

(3) 香港歴史档案馆について（香港 Public Record Office）

香港特別行政区政府の政府档案処が管轄する歴史档案馆は1997年に建築が完成。香港歴史档案馆の主な機能は，档案の鑑定と整理，档案の保護と修理，档案の公開と提供という三つの機能である。

歴史档案馆が所蔵する資料のなかでもとくに重要なものは

- ① 土地調査や土地契約・税に関連する文書群。1846年－1975年の官有地契約関連文書は，不動産など研究は勿論，契約関係などを眺めるときの極めて有効な資料である。また，法院と法律事務に関連する档案が保存されていることも特筆しなければならない。
- ② 戦時档案－歴史档案馆は日本占領時期の香港の行政，軍事などに関する膨大な資料を所蔵している。日本側の行政機関が取り交わした各種の土地契約関係の文書は勿論，イギリスが日本に行政権を渡すときに作成された文書，戦争捕虜の人名録や待遇に関する記録などが重要。
- ③ 歴史档案馆はイギリスのPROからCO129（1841－1951年の期間中香港政庁とイギリス本国との間で往復された公文）を購入している

今回，閲覧したのは主に日本占領期の香港に関する新聞記事について。アーキピストのJonathan氏が『星島日報』のほかに『華僑日報』と『The Hong Kong News』という新聞が日本占領期の香港で最も広く読まれた新聞であることを紹介してくれた。

新聞の一部を申請し，閲覧，複写をとる一連の過程を確認したが，スムーズな進行。短い期間でも確実に連絡をとることで大きな成果を挙げることが可能と思われる。

『The Hong Kong News』の「Radio Hong Kong」という欄を複写。Call SignはJ PHA。7時30分に放送開始，10時40分に放送終了であったことが分った。そのほかに，『香港華僑日報』も一部「本社成立宣言」を複写。

2-5 上海での意見交換 part 1

11月10日 上海／華東師範大学／易恵利 教授 華東理工大学／喻 Huikang 教授

11月11日 孫，東京へ。鈴木，杭州へ

上海での意見交換は華東師範大学の易恵利教授，華東理工大学の喻 Huikang 教授，そして，本学教授で在外研究中の大里浩秋が参加して意見を交換した。最近の中国の大学では国際交流を積極的に進めており，華東師範大学と華東理工大学も神奈川大学との交流を進めることには基本的には賛成であるが，対外交流を担当する部署との意見調整が必要という現在の状況を相互が確認した。た

だし、外事弁工室などの部局を経由しない、研究所や学部間の交流（雑誌交換や学術情報の交換など）は速やかに実践したいとのことであった。

2-6 杭州での意見交換と調査活動

- 11月11日 浙江大学日本文化研究所において以下のメンバーと鈴木の間で交流問題を話し合った。
所長 王勇教授 副所長 王宝平教授 呂順長助教授
中文系 金健人教授
- 11月11日 富陽市龍門鎮（三国時代呉の孫權の子孫が住むとされる伝統的住居群）の調査
- 11月13日 建徳市梅城鎮で、「白蛇伝」関連の民間伝承を調査。
- 11月14日 日本文化研究所において交流について再度話し合い。

(1) 基本方針の確認

- ① 神奈川大学人文学研究所と浙江大学日本文化研究所は、今後とも信頼すべきパートナーとして学術交流を継続する。
- ② 交流は平等互惠とする。旅費のうち渡航費は渡航する側の自己負担、滞在費の主たる部分は受け入れ側の負担とする。
- ③ それぞれが国際的な学術活動を企画する際には、必ず相手方に連絡し、協力して実施する。

(2) 来年度の交流について

- ① 人文学研究所より来年度開催予定のシンポジウムについて、また日本文化研究所より来年度開催予定のシンポジウムについて、それぞれ説明を行った。双方はそれらの主旨に賛同し、全面的に協力する旨を確認した。
- ② 来年度開催のシンポジウムにどの程度の人数を派遣するかについては、今後、計画の具体化に伴って検討していくこととした。
- ③ 来年度は、浙江大学が日本開催のシンポジウムに参加する順になること、その場合、派遣者数は過去に比べて減少させること、ただし、両研究所の学術交流が継続していることが明らかな規模の参加者数であるべきことを双方が確認した。
- ④ 中国の他の大学からシンポジウムへの参加者を招請する場合、浙江大学をキーステーションとして、人員の組織化がなされるよう浙江大学から要請があり、これを了承した。とりわけ、「環中国海の文化交流」については浙江大学の協力が不可欠であるということを確認した。
- ⑤ 浙江大学より、来年の五月、副学長及、王勇日本文化研究所所長、張夢新共産党書記が大坂の四天王寺国際仏教大学を公式訪問する予定であることが報告された。その際、神奈川大学を訪問したいという意向であること、そのことを人文学研究所より予め国際交流センターに伝えておくことが確認された。

(3) 学術調査

省略

2-7 上海での意見交換 part 2

11月15日～17日 上海師範大学において、社会科学学院、上海師範大学共催「第二回中国古典小説国際シンポジウム」に参加し、上海師範大学人文学院院長孫遜氏と学術交流について話し合った。

上海師範大学との学術交流についての確認事項は以下の通りである。

- ① 刊行物，研究情報の交換を行う。
- ② 双方が行うシンポジウム等の国際学術交流については，可能な限り協力する。
- ③ 国際交流に当たっては平等互惠を原則とする。

3 2003年度に向けて

以上のような活動を通じて，本研究所は新たにアジアの各地域の研究機関とのネットワーク造りのための第一歩を踏み出すことができた。この成果を踏まえ，2003年度の国際学術交流は更に実りあるものとなるよう，複数のシンポジウムを計画し，予算案の申請を行った。

4 補

2003年2月，上海師範大学より，上海を中心とした都市研究について，シンポジウム（2003年6月開催）への参加と，2004年以降，シンポジウム共催の呼びかけがあった。

講演会要旨

開催日：2003年2月26日（水）午後4時30分～午後7時10分

会場：神奈川大学人文学研究所資料室（17号館216号室）

講演者：佐佐木茂美氏（明星大学大学院教授）

演題：「地上の楽園」と二本の樹—生命の樹と知恵の樹—

ヨーロッパ文学における「自然」というテーマを求めて、あるいは環境科学の根本精神について思案を深めたく、あるいは中世フランス語に対する興味を抱いて、参加者は集まった。講演を聴くうちに、講演者により繰り広げられる緻密で広い学識によって、思いがけずはるかに深い世界にまで招き入れられた、というのが参加者の大方の感想ではなかったろうか。

講演内容は、つまりは、13世紀前半に書かれた作者不詳の『聖杯の探索』の物語に見られる、根源的なテーマである「地上の楽園と樹木」についての論考である。その検証を正確になすために、講演者はこのテーマをめぐる始原にまで遡るのである。『創世記』、『聖書外伝』、中世の教父たちの著述、民間に流布した書物を検討する。楽園を放逐されたアダムとイヴおよび三男セツと「楽園と樹木」とが、それぞれのテキストにおいてどのような記述をされているか、について周到な検討を加えるのである。

始原についての論考が語られ、いよいよ本題である『聖杯の探索』について述べようという時には、既に2時間が経過していた。

（文責：佐藤夏生）

2002年度 人文学研究所活動報告

共同研究グループ

ポストコロニアル・スタディーズの冒険

本研究グループは、2000-2001年度神奈川大学共同研究奨励金「ポスト植民地主義思潮の研究」の成果として、神奈川大学評論叢書第10巻『ポストコロニアルと非西欧世界』御茶の水書房（2002年9月）を公刊した。今後の研究活動の展開については、現在模索中である。

（永野善子）

現代精神史におけるスペイン内戦の意義

グループ：「スペイン内戦の精神的意義」

活動内容：2002年度は、構成員で座談会を一回持ち、今後の展望について協議した。構成員数が少数であり、さらに重要メンバーが定年退職されることを踏まえ、当共同研究の意義は確認されつつも、2003年度以降の活動・展望については、さらに協議を重ねる予定。

（大林文彦）

物語研究

本グループは発足して7年になる。本年度の活動は、構成員各自の研究には進展があったものの、グループとしての活動は、残念ながら低調だった。

本グループの研究は、神話、伝承、前近代の物語、近代小説まで、口承書承を問わず、物語性をもつ言語表現の形態全般を対象として、ストーリーやプロットなどの（構造的）論理を考究すると共に、時間的・偶然的な要因である歴史性についても幅広い視点から考察を深めることを目的としている。

ただ、グループの発足以来の悩みは、構成メンバー6名（常勤教員5名、非常勤教員1名）と少ないうえ役職者も多く、研究活動の日程調整がきわめて難しいことであった。今年度は、殊に大学の諸制度の見直しと改革が強力に推進される過程に当たっていて、一層困難が大きかった。その結果、冒頭に記したような状況に追い込まれたのだが、大学改革が今後も半ば恒常的に進められなければならない以上、グループ活動のあり方を抜本的に見直す必要に迫られている。この事実を率直に認めなければならない。

幸い、平成15年度には、本研究グループの発起人であり、実質的な責任者でもある日高が学部長職を離れ、再度イニシアチヴをとれる環境が整う。それを前提として、平成16年度に研究成果の刊行を期して活動を再活性化したい。

なお、上記の困難な研究条件の中で活動を継続する方策として、構成員各自がある程度纏まった文章を他の全メンバーに随時送付して相互批判を乞うという融通性のあるシステムを採用し、これを「物語研究会通信」と名付けてきた。他のメンバーが来信に自由に応答しながら、次の発信を用意するのである。本年度も、一例を挙げれば本学の公開講座とタイアップして鈴木（陽）が編書『中国の英雄豪傑を読む―「三国志演義」から武俠小説まで』（大修書店）を出版するなど、この面ではそれなりの成果があった。

（小馬 徹）

自然観の研究

1. 「自然観の研究」グループ

2. 研究会の開催

2003年2月26日、神奈川大学人文学研究所

佐佐木茂美氏（明星大学大学院教授）

【“地上の楽園”と二本の樹：生命の樹と知恵の樹】

3. 活動内容

研究テーマは「自然観の変遷と展望」であり、以下の三分野について順次、研究会および講演会を行っていく。2005年度の「叢書」の刊行を予定している。

- 1) 思想における自然観（2000年度，2001年度）
- 2) 文学における自然観（2002年度，2003年度）
- 3) 環境における自然観（2004年度）

（佐藤夏生）

西洋文化の受容—思想と言語—

テーマ

近代日本における西洋文化受容の総合的研究

活動計画

本学共同研究奨励金（2001/2002年度）を受け、月例会・研究会・海外調査・国内調査と精力的に活動してきた。今年度は、これまでの成果をもとに論文集の出版を予定している。

出版原稿の読み合わせを兼ねた月例会、研究会と共に、テーマにもとづいた講演会を外部講師を招いて行いたい。

メンバー

鈴木（修）・岡島・中島・伊坂・高野・吉井（法）・池上（経）

岡野（名誉教授）・浅山（非常勤） 9名

本年度出版予定

（高野繁男）

野球にみる横浜学

代表者 三星宗雄

メンバー 三星宗雄・鈴木陽一・矢野博・寺沢正晴

1. 活動報告

- ・講演会 なし
- ・研究会 なし
- ・発表論文，学会発表等 なし

2. 図書購入

D. L. Porter(Ed.)

“Biographical Dictionary of American Sports : Baseball” 2000年4月出版

3. 内容

アメリカにおける野球の歴史的データブックで、特に黒人リーグや女子リーグについてのデータも含まれている。それらのリーグについてはメジャーリーグとは異なった歴史的展開をした経緯があり、我が国との関係を考察する上で重要なものである。

（三星宗雄）

環東シナ海伝承文化の総合的研究

I 環東シナ海伝承文化の総合的研究

II 共同研究メンバー

大里浩秋, 河野通明, 鈴木陽一, 佐野賢治, 孫安石, 中島三千男, 廣田律子, 福田アジオ, 彭国躍, 山口建治

III 研究目的

人文研究所の共同研究グループ「東アジア比較文化研究会」は、これまで日本・中国・朝鮮の文化を比較し、相互の影響関係やそれぞれの独自性を検討する作業を行ってきた。本研究は、この共同研究を基盤にしつつ、東シナ海をとりかこむ、日本・中国・朝鮮・臺灣の環東シナ海の伝承文化を総合的に研究することを目的とする。

東シナ海沿海の各地域は、それぞれ固有の伝統文化を育んできたが、同時に共通する側面もまた少なくない。古来、様々な人々がこの海域を縦横に行き交い、交流・接触が行われてきたからである。今回の共同研究では、この海域沿岸部の人々の暮らしと伝承文化をつぶさに調査し、その交流・接触の様相・形跡を洗い出すことに努める。共同研究メンバーの個々の特性を考慮し、今回の中心課題は1, 生業とその用具, 2, 祭りと芸能, 3, 神話と民話の3領域とする。

IV 今年度の活動内容

今年度は共同研究メンバー個人による調査を中心に活動を行った。

1 研究講演会（神奈川大学中国学会と共催）

何彬（東京都立大学助教授） 「中国福建省の巫と風水」

2 調査活動（予定を含む）

山口	9月21日～23日	名護市での全国獅子舞シンポジウムに参加すると同時に、旧暦8月15日に行われる名護市東江の豊年祭 ^{あがりふ} の行事全体の中で中心的な役割を担っているのを実地見聞した。
孫・山口	2月24日～3月2日	山東省へ民俗文化の調査
廣田	3月12日～16日	北京へ祭祀演劇についての資料調査
鈴木	3月12日～23日	江西, 浙江へ民俗文化の調査
中島	3月26日～31日	山東省へ海外神社の調査
佐野	3月17日～21日	石垣島は風水関係資料調査

(鈴木陽一)

共同研究奨励金グループ活動報告 (2001 - 2002年度)

グループ名

西洋文化の受容—思想と言語—

研究テーマ

近代日本における西洋文化受容の総合的研究

構成メンバー

浅山佳郎・伊坂青司・岡島千幸・岡野哲士・鈴木修一・孫安石・高野繁男（以上、外国語学部）、吉井蒼生夫（法学部）・池上和夫（経済学部）

研究の目的

本研究会は、上記のテーマにより、2001-2002年度の、神奈川大学共同研究奨励金を受けた。近代日本において西洋文化がいかにかに受容されたか。明治7年から8年にかけて刊行された『明六雑誌』をテキストに、その精読と討論・調査・研究を基本に、共同研究によって、多面的総合的に行ってきた。

『明六雑誌』は、日本が近代化するに当たって西洋文化を受容する過程で決定的な役割を果たしており、その影響は文献の翻訳紹介のみならず、近代日本における思想文化の形成に及んでいる。その意味で『明六雑誌』を媒介とする西洋文化の受容は、現代日本の思想文化の原点をなすものである。

その内容は多岐にわたる。個人の専門領域からだけの研究では限界があり、多角的な共同研究が有効であるとの前提から、本学の哲学・倫理学・歴史学・言語学・法律学・経営学を専門とする教員を構成メンバーとしている。

研究会の開催

2001年度

- ① 例会 『明六雑誌』の精読と内容の検討；背景にある西洋思想や制度、日本の近代化を取り巻く事件や人物、新しい言語の創造などについて検討する。9回実施
- ② 箱根保養所での研究会 1泊2日（2001年11月10, 11日）
- ③ 中国・上海社会科学院、上海図書館、南京図書館の調査。（2002年3月11～18日）

中国は日本より先に開国し、英学の科学書や『聖書』を翻訳、また「英華字典」を編集した。日本はこれを鎖国中や英語に不案内な期間に輸入し利用した。とくに、1868年に上海に開設された江南製造局翻訳館は199点の英学書を翻訳し中国西学が飛躍的に発展した。日本でも、後にその制度を取り入れ、文部省編纂局が開設され英学書の翻訳のセンターとなった。江南製造局翻訳館が翻訳した訳書は日本にも輸入されたが、今日では、ほとんどが散逸している。今回の上海図書館の調査で、そのすべての訳書を同図書館が所蔵されていることを確認すると共に、その一部を閲覧することができた。これらは『明六雑誌』の基礎的な資料になったものである。今後の課題の発見につながる多くの成果を得た。

（参加者、伊坂青司・鈴木修一・孫安石・高野繁男・吉井蒼生夫）

2002年度

① 例会 前年度に続き、月例会をもった。7回実施

『明六雑誌』の講読研究会は、研究奨励金を受ける前からのもので、4年の期間にわたる。この例会には、本学の非常勤教員や他大学からの参加者もあり、予想以上の賑わいになった。ひとまず、全43号の大部分を読む見通しになった。

② オランダ・ライデン大学での調査。(2002年9月3日～15日)

文久2年「幕府オランダ留学生」が派遣される。総勢15名、その中に『明六雑誌』の主導者となる、西周・津田真道が含まれ、そのほか榎本武揚・内田正雄・田口良直・伊藤玄伯・林研海などが派遣された。その後の、日本の近代化の主導者となって活躍したメンバーたちである。

1) ライデン大学での調査

西周・津田真道がライデン大学で講義を受けたフィッセルグ教授の自宅（日本の留学生が訪問したり指導を受けた場所）、および西・津田の下宿先などの視察。

ライデン大学図書館・日本語学科図書室の閲覧（日本人留学生が使用したテキスト・参考書などの閲覧）

ライデン大学関係者・日本人大学院生たちとの研究交流。

ライデン市立古文書館の調査。

2) 西・津田・箕作秋平ら日本人留学生の手紙や写真などをCDにコピーし持ち帰った。また、1862年にライデン大学が編集発行したオランダ語、日本語対照の『Japan in Laiden / The Honorable Visito / 誉れ高き来訪者』をライデン博物館で入手した。

3) ライデン大学・法学部

法学部研究室・ゼミ室は、旧監獄の建物を利用している。

4) シーボルト植物園

ライデン大学の構内に造られた広大な公園で、園内には植物研究所と共に、シーボルトが日本から持ち帰った樹木、花の類が育ち、まるで日本にいるような雰囲気であった。

※ライデン市、および大学での調査には同大学日本語学科教員・大屋則夫氏の全面的な協力と便宜を受けた。

(参加者 浅山佳郎・鈴木修一・吉井蒼生夫・高野繁男)

結びにかえて

『明六雑誌』は、これまで近代史の資料として用いられた。本研究会のように、思想・法律・経済・歴史・言語などの多面的な視野から総合的に共同研究されることはなかった。現代のようなグローバルな時代をむかえ、日本は、今後どのような方向に向かうのであろうか。日本が、近代化の名のもとに西洋化に向けてひた走った原点として『明六雑誌』を位置づけ、改めて現代の視点から「西洋文化の受容」を総合的に問い直そうとするものである。

来年度は、これまでの成果を最大活用し、共同研究のテーマに沿って、個個人の専門の立場から、これまでの検討を生かした論文集の出版を目指している。

(記録・高野繁男)

新規購入主要文献解題

『ゴシック様式の復活』

Michael Charlesworth 著

Helm Information Ltd. 2002年4月刊行 (2040頁)

12-16世紀の中世西ヨーロッパでは、ゴシック様式が建築を中心にして絵画・彫刻・装飾などに広く用いられた。イギリスでは、18世紀中頃にはピクチャレスクな庭園が流行するようになり、また宗教建築だけでなく世俗的な建築物もゴシック様式でつくる中世趣味が盛んとなった。中世の再発見によって出現したゴシック・リバイバルは、19世紀になると最盛期を迎えたが、1870年代末には衰退に向かった。

政治家H.ウォルポールは、1747年に自邸ストロベリー・ヒルにゴシック様式の小城を建てて、『オトランド城奇譚』(1764年)を書いた。この新しい小説はイギリスのゴシック・ロマンスの先駆となった。その特徴は、高い尖塔やアーチなどの特異な外観と雰囲気によって引き起こされる人間心理の探求であり、超自然的な怪奇と恐怖の扇情主義であった。

イギリス・ロマン主義運動は、ゴシック・ロマンスの影響を受けている。その代表的詩人・批評家のS.T.コウルリッジは、中世期風の超自然的で奇怪な長編詩『老水夫行』(1798年)を創作した。彼はゴシック芸術の特徴を「無限なるもの—広大、莫大、完全とかではなく、現実の感覚的存在の領域内に限定されないものの象徴的表現」と表現している。

ヴィクトリア朝時代には、J.ラスキンは『ヴェニス石』(1851-3年)を書いてゴシック建築の礼賛を頂点にまでもたらした。さらに彼は芸術と社会・経済問題を結びつけていく。国会議事堂(1850年完成)や王立裁判所など数々のゴシック様式の公共建築物は、当時の文学の流れに大きな影響を与えた。

これまで建築と文学という二つの芸術のジャン

ルはあまり一緒に論じられなかったが、本論文コレクションは、ゴシック様式の復活と新しい文芸思潮誕生の流れを当時の全体的文化運動の一部として位置づけ、社会史、建築史および文学史からその関係性を浮き彫りにした貴重なコレクションである。
(文責・岩崎豊太郎)



『俗文学叢刊』

台湾中央研究院歴史言語研究所編、台湾新文豊出版、2002年～継続刊行中

本叢書は台湾中央研究院の歴史言語研究所内の傅斯年図書館蔵の俗文学資料を影印したものである。本叢書に収められた資料の来源は、1918年(民国7年)に劉復が北京大学において結成した「歌謡徵集処」にある。北京師範大学において周作人が始めた歌謡研究会に続いて結成された歌謡徵集処は、10年後に民間文芸班となり、民間の「俗文学」の資料収集と整理、研究及び成果の刊行を始めるに至った。この時期の研究成果として、劉復編『宋元以来俗字譜』、劉復、李家瑞共編『中国俗曲総目稿』、李家瑞編『北平俗曲略』などは今日も利用されることの多い、民間文学、俗文学の基本的な資料集である。今回、こうした目録、リファレンス作成に用いられた原資料が影印、刊行されたことは、俗文学のみならず中国文学研究者にとって極めて大きな意味をもつ。しかもこれらの資料については、すでに書目稿が公開されており、また部分的ながらネット上で閲覧も可能であっただけに、その全体を直接手にとって見ることができるのは我々にとって大いなる喜びである。

ここに収められたものは、民間の芸能において演じられたテキストであり、その価値の重大さについて、我々はようやく認識をするに至ったに過

ぎない。我々は少なくとも、これらの物語群から、小説、戯曲のルーツとなる物語の原初的形態を探ることができるし、脈々と息づいている民間信仰の中に現れる神話・伝説についても貴重な手がかりを見出すことができると思われる。中国に限らず、アジアの民間文学、民間信仰の重要な資料として大いに活用されることが期待できる。(文責・鈴木陽一)



『清蒙古車王府蔵曲本』

首都学苑出版 2001年12月

本シリーズは清代18世紀のモンゴル族貴族、喀爾喀賽音諾諺部の車布登札布、通称車王が収集した北京の戯曲、芸能のテキストを影印したものである。原本は全て刊本ではなく書写本であるが、その美麗さから、相当数が宮中の梨園で用いられていた戯曲、芸能の脚本類であろうと考えられている。また、当時、演じられた芸能を記録し、これを美麗な写本に仕立てて販売したり、賃貸する商売が相当に繁盛していたが、そこから購入したものも少なくないであろうと思われる。いずれにせよ、これだけ大量の、18世紀北京という限定のある戯曲、芸能の上演テキストを見ることができるとは、今後、中国の文学研究全体にとっても大いに意味があろうし、また北京という都市の歴史研究にも益するところ大である。

なお、前述『俗文学叢刊』には混乱の中で車王府から散逸したテキストの一部が収められている。また、『俗文学叢刊』と『車王府曲本』とを比較してみると、同じ民間の物語であっても、一般庶民の愛したものと、貴族達が好んだものとの違いが見えてくるはずで、この二つの資料を同時に購入したことで、それぞれの資料の利用価値は一層高まったと言えよう。(文責・鈴木陽一)



『大連図書館蔵孤本明清小説叢刊』

春風文芸出版社 2000年

かつて大連にあった満鉄図書館には、大谷氏より中国古典小説がまとまって寄贈された。孫楷第の目録(『日本東京所見中国小説書目——付大連図書館所見中国小説書目』)によれば、日本での写本も少なくないが、収められた小説は当時さほど評価の高くなかったものが多い。しかし、今となって見ると、ここに収められた小説の多くは明末清初に出版された、美男美女がハッピーエンドを迎えるという「才子佳人」小説と言われるもので、文学史上、『金瓶梅』に代表される明の小説と、『紅樓夢』に代表される清代小説の間の空白を埋める作品である。その意味で、すでに多くの研究者がこの作品群に着目してきたが、原本は無論のこと、書目さえも公開されてこなかった。幸いに80年代に春風文芸出版社より活字本が出版され、また現埼玉大学教授大塚秀高氏が中国側の協力を得て、短期間ながら版本調査を行い、ようやく少しずつ貴重な資料が陽の目を見るに至った。しかし、出版されたテキストの多くが天下の孤本とあって、校勘記もない活字本では使いようもないというのが多くの研究者の見るところであった。今回ようやく原本の影印本が刊行され、文学史上の空白を埋めるための貴重な資料が本格的に利用可能になったのである。

すでに、これまでの版本研究の見直しによって、15世紀から18世紀に至る中国小説史を再検討する動きが始まっており、そうした新たな研究動向にこの貴重な影印資料が大きく寄与するであろうと思われる。また、これらの資料が日本から中国へ渡っていった過程には、日本の書誌学や近代史の研究にも関わる問題が存在しており、こうした点からの活用も大いに期待されるのである。(文責・鈴木陽一)

所員の自著紹介

『ロマン主義の詩と絵画—ブレイク、ワーズワス、ターナー、コンスタブル—』

岩崎 豊太郎著

英潮社 2002年9月25日 (239頁)

ターナーが風景画《ロンドン》に描いた19世紀初頭のロンドンの景観は、現在、高層建築物群によってほとんど見るができない。タウンスケープ変貌の問題は、京都や北京など、歴史を持ち再生のために巨大なエネルギーを活動させている大都市についても言えることである。童謡「ロンドン橋が落ちる」は、ロンドン橋が新たな橋梁工法で架け直された歴史を思い起こさせる。理想都市ロンドンはどのように実現されるのであろうか。

本書は、産業革命やフランス革命などの変革期に流行したピクチャレスクと崇高美を視座に置いて、自然観、想像力、都市幻想の視点から、ブレイク、ワーズワス、ターナー、コンスタブルという、4人のイギリス・ロマン主義の代表的芸術家たちの永遠の世界を瞥見すべく、これまでに発表した拙論を再編し、絵画・版画の図版28点と著者撮影の写真14点を載せて、一冊の本にまとめたものである。この企は私の力量の及ぶところではないが、イギリスでワーズワスとエコロジーをテーマとする書物が出版されているように、彼らの作品が今日の景観論、都市、エコロジーなどの諸問題を考える上で役立つことを私なりに説明したかったのである。

もともと執筆の動機となったのは、故佐野正巳先生と私とがそれぞれ日本文学とイギリス文学の観点から詩と絵画について研究を始めたことであった。先生が一昨年暮れに急逝されて本書をお見せできないのが残念である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『未完のマルクス』

的場 昭弘著

平凡社選書 217 2002年5月 (302頁)

本書は、マルクス死後のマルクス遺稿をめぐる物語である。エンゲルス、社会民主党、ソ連の遺稿をめぐる闘争と、社会主義のテキストとしての編集過程を抉り出すことによって、テキストの政治性を暴く。マルクスのテキストが社会主義の聖書となったことによって起ったさまざまな事件は、20世紀最大の悲劇かもしれない。真のマルクスを求めるといふ闘争が、人々を翻弄し、勝手な解釈と自己正当化を作りだしていった姿は人間の性のおぞましさかもしれない。

とはいえ、リヤザノフ、マイヤー、リュベルなどの果たした役割、『ドイツ・イデオロギー』、『経済学・哲学草稿』などの出版、資本主義の暴挙への抵抗勢力としてのマルクス主義にテキストが果たした役割などを過小評価するわけにはいかない。テキストの完全な復刻は不可能だとしても、せめてマルクスが残したかたである形での遺稿集の完成は可能であろう。政治権力の魔の手から離れた現在、その実現の可能性は大である。しかし、政治権力の魔の手が消えるとともに、その魅力と関心が世間から失ってしまったことは、まさに歴史の皮肉と言わざるを得ない。21世紀のわれわれが知の遺産をどう受け継ぐかは、マルクスの遺稿だけの問題に限られるのではない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

執筆者紹介

八久保 厚 志

本学外国語学部助教授

上 條 雅 子

本学外国語学部教授

編集後記

今年度の所報は、寄稿された論説が、わずかに二篇という、やや寂しさを感じるものとなりました。国外研究や多忙などのために、いわば“常連さん”のような先生方から、原稿をいただけなかったことが心残りですが、編集者の無力さと責任を痛感しています。とはいえ、掲載された二本の論文は、どちらも、秀逸な力作です。一人でも多くの方に読んでいただくことを願っています。

ところで、二期四年間務められた鈴木所長も、この三月で勇退されます。お疲れ様でした。在職中の御尽力と研究所の発展には、感謝と敬意を表します。研究所と所報のさらなる発展を、新たな所長と、常任委員の諸先生に託して、編集の作業を終えたいと思います。(T)

人文学研究所

所 長 流 報 演 書
國 際 交 流 計 講 叢 書
所 會 計 研 究 叢 書
會 計 講 叢 書
函 共 同 研 究 叢 書

陽 安 正 喜 清 典
一 石 晴 代 治 子
木 沢 屋 野 本
鈴 孫 寺 古 西 岩

人文学研究所報 No. 35

二〇〇三年三月二五日 印刷

二〇〇三年三月三〇日 発行

頒 価 一、〇〇〇円

編 集 兼
発 行 人

横 浜 市 神 奈 川 区 六 角 橋 三 一 二 七 一
神 奈 川 大 学 人 文 学 研 究 所

代 表 者 鈴 木 陽 一

電 話 〇 四 五 (四 八) 五 六 六 一 (代 表)

印 刷 所

株 式 会 社 欧 友 社

電 話 〇 三 (三 三 六 〇) 六 〇 四 六 (代 表)